

4. アユ釣りの文化と歴史

鈴木康友（つり人社）

「友釣り」のルーツはどこにあるのだろうか？多くの先人たちが調べたが、誰一人として、場所も時代も特定することが出来ていない。アユが遡上して縄張りを持ち始めると、激しい“追い払い行動”をする。その光景は土手の上から容易に目撃できる。それを見た人が「あの追いかけっこしているアユの尻尾にハリを付けたら簡単に掛かるだろう」と思うのはごく自然なこと。アユは日本中に生息しているので、日本中で自然発生的に「友釣り」が行なわれてきたと考えるのが妥当だろう。

ハリに付けたエサや擬似餌に食いつかせてハリ掛かりさせる一般的な釣りと異なる「友釣り」は、日本独自の釣法だという人がいる一方で、「朝鮮半島から伝わった」という人もいる。歴史の長さや大陸文化の流入経路を考えると、中国や朝鮮半島から伝わってきたということも十分に考えられる。

しかし、その技術を高め、文化として定着させたのは日本人である。韓国では近年、ブームと呼ぶ人がいるくらい「友釣り」が人気になっている。中国までアユ釣りに出かける人もいる。台湾のアユが絶滅したというので、日本から10年間種苗を運んで放流した。そのアユも絶滅したと言われていたが、最近ネットに釣果を書き込む人もいたので、昔放流したアユの子孫が命を繋ぎ、釣りの対象になるほどの復活を遂げたのか……。

伊豆・狩野川畔の大仁町で発見された江戸時代の代官への嘆願書に「友釣りが流行り出して網や簗でアユが獲れなくなったので、禁止してほしい」と書かれている。狩野川流域には多くの温泉があり、その宿では必ずアユを食膳に乗せた。アユを供給していた漁師たちの技術はかなり高度なものだった。競争も激しく、他の河川に出稼ぎにでかける者も多くいて、そんな人たちが各地に伝説を残した。

出稼ぎ先は関東周辺にとどまらず中部地方

や関西にまで及んだといわれる。高値でアユが取引されることで知られ、多くの名人川漁師を生んだ岐阜県の長良川でも、出稼ぎに来た狩野川漁師から最先端技術を教えてもらったといわれる。これらの言い伝えから狩野川漁師が友釣りを各地に広めたことは間違いのない。

出稼ぎの足は汽車である。その汽車に長いノベ竿を持ち込むわけにはいかないので、“継ぎ竿”が必要になる。現代アユの竿の原点は狩野川漁師の出稼ぎツールにあったのである。

竹からガラス、カーボンとアユ竿の素材が変化し、今や9mで200g以下という驚異的な軽さを実現し、そのパワーも申し分ない。世界一のカーボン素材メーカーである「東レ」の技術者は「アユ竿メーカーの技術革新がなければ、宇宙ステーションの開発がかなり遅れたと思います」とテレビ番組で話していた。

イトも自然素材からナイロン、金属、複合素材と進化し、一昔前では考えられないほど細く強くなった。

ハリも細くて強く磨耗しにくいものになった。

そんなアユ釣り道具の驚異的な進歩は1980年代前半から始まり、毎年新製品が登場するので、2、3年アユ釣りから遠ざかると“浦島太郎状態”になるほどだった。

アユ釣り大会もこのところ盛んになり、多くのスターを生んだ。彼らは、道具の進歩と歩調を合わせるように毎年のように新しい釣法を編み出し、効果を実証した。そのほとんどが団塊世代で、今や還暦を迎える老人ながら、若者に混じって競技を楽しむ“困った元氣オヤジ”もいる……。